

障害と暮らす建築

- 日常をリノベーションする演劇的福祉の提案 -

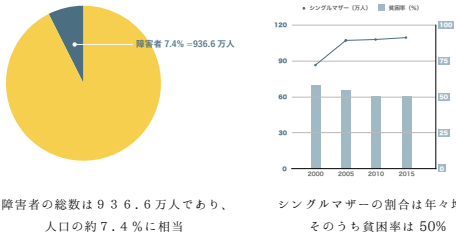
早稲田大学古谷誠章・藤井由理研究室 齊藤実紀

0 | はじめに

福祉の場は一般的に健常者の意識の外にある。障害によって生まれたズレを建築化しひらくことで、障害者にとってはバリアフリーであり、かつ健常者にとっては新たな身体性を発見する場として両者の関係を再構築する。北千住の商店街を敷地として、独居老人、車椅子の老人、聴覚障害のある老人、シングルマザー、寝たきりの老人の5つの障害を対象に舞台装置としての住宅を設計した。彼らの身体性から生まれる寸法やズレに段階的に入り込んでいく空間によって、障害者と健常者の優位性が逆転する瞬間をつくりだす。ズレを受け入れ障害を多様性の中に位置付けることで、障害/健常の境界を揺るがし福祉への視点を転換する、新たな建築の提案。

1 | 背景

本来医学的には健常と障害を明確に分けることはできず、スペクトラムで曖昧な境界を持って連続しているものとして捉えられる。現在日本国内における身体的・精神的・知的障害者の割合は7.4%であり、人口にして936万人に及ぶ。また、身体的な障害だけでなく、老化や独居生活を送る高齢者、ひとり親世帯など、一般的に生きづらさを抱え[マイノリティ]と呼ばれる人々の人口も、実際には増加傾向である。



現在の「福祉」の概念は住宅政策の対処療法的に施行されて来たものであり、福祉と住宅は分断されて考えられてきた。「健常者」による「正常な」社会の枠組みから溢れた人々が収容されるものとしての福祉施設という概念が強く存在している。その心理的境界は福祉施設や在宅福祉における様々な問題を引き起こしている要因そのものであり、健常者/障害者をマジョリティ/マイノリティとして認識する態度を更新していく必要があると考えた。



2 | 演劇的性をもった福祉のあり方

健常者/障害者に対する意識の分断に対し、「演劇性」をもたらすことによって新たな障害との関わり方を与えられないかと考えた。演劇や芸能とは天岩戸伝説に代表されるように、かつては神々や霊的な何か、異世界と日常を繋ぐメディアとしての役割を持っていた。現代における演劇の役割を、都市の見えないレイヤーに隠された、日常では出会うことのない他者と出会うためのツールと捉える。



3 | 敷地：足立区北千住ミリオン通り商店街

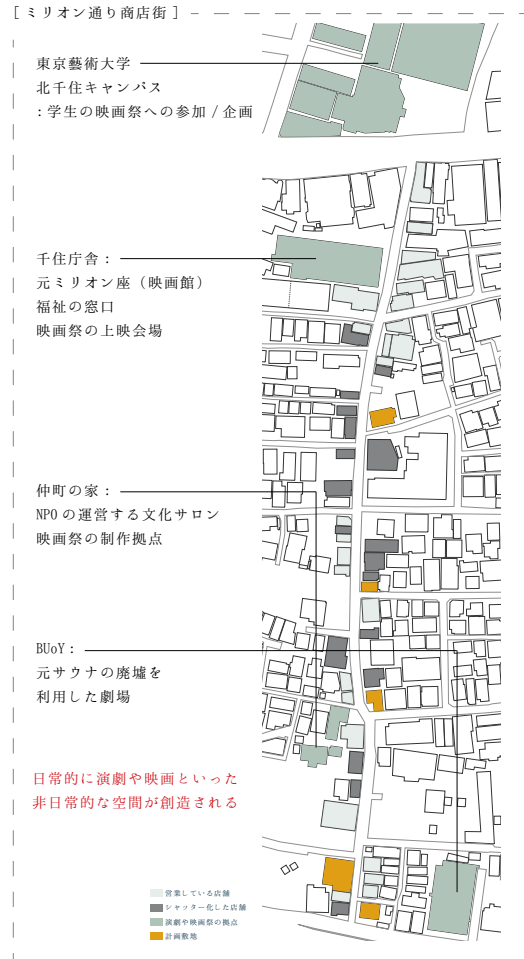
東京都23区の中でも高齢者率ももっとも高く、出生率が5番目に多い足立区。北千住には5つの大学が集申し小さなエリアに多様な世代の人々が集まる。

敷地としたミリオン通り商店街では東京藝術大学のキャンパスからのアクセスがよく、南には現代演劇を上映するアートセンター、またこの商店街を中心に一般市民だけの映画制作や上映会を行うなど、日常的に演劇が創造される街である。本計画をこの演劇制作の延長として位置づけ、空間体験や実際の生活を通して住民や演劇を目標にこの街にやってきた人々（健常者）が障害や自身の身体性、いつか起こるかもしれない自分や家族の老いや境遇と出会う劇場となる。

本計画では、ある事物を演者/観客の2つの立場に振り分け観客が発見の体験を経験すること、それによって日常の認識や態度を更新していくことを「演劇性」と定義する。

これからの福祉は可視化や身体的体験を通した演劇的な関係性を生み出すことによって健常者の認識を転換することができるのではないかと

これまで可視化されていなかった障害と遭遇し、健常者が新たな身体性を発見するような場(=演劇の場)となる



日常的に演劇や映画といった非日常的な空間が創造される

4 | リサーチ：演劇性をもつ都市空間の研究

これまで日本国内外の都市を訪れ、自然発生的に観光地化していった場所の作られ方、またそれによって生じた新たな空間の仕組みを研究して来た。複数都市に滞在・調査する中で、①そこに生活する/高いを行う人々があり、誰もが何かしらの役を持って生き生きとした生活を送っていること、②そこに訪れた他者がその場所の楽しみ方や実利的な機能とは異なった空間の魅力を見出し、価値を与えていることがわかった。



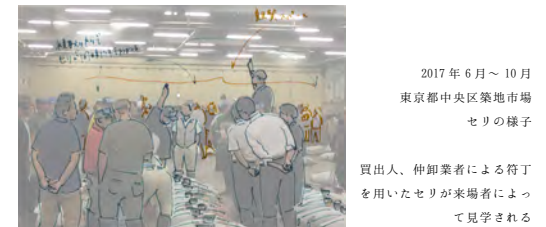
文化や風景そのものが魅力となり、自然と観光地化した様々な都市集落の研究

[知らない路地の映画祭]

「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」のレジデントアーティスト友政麻理子が発起人となり、2015年度から千住地域で一般参加者が自主映画と手作りの映画祭を行ってきたアートプロジェクト。参加の仕方は出演から脚本、小物の提供、家の貸し出しなど多岐にわたり、できる形で参加すればよい。



現地にてマッピングと聞き込みを行い、現在営業中の店舗、シャッター化または建て替わってしまった旧店舗についてはかつて何の店でどのような人が住んでいるのかなどを調査した



2017年6月~10月 東京都中央区築地市場 セリの様子

買出人、仲卸業者による符丁を用いたセリが来場者によって見学される



2018年8月 インドネシア・トゥガナン村 住宅兼店舗での住人の生活の様子

生活空間と小さな生業の空間が共存し、住環境を改善しつつ商業を展開する空間

5 | 都市における演者と観客の5つの「動的」関係

人々が個々に役割を持ち、その魅力を他者が発見し、その空間や出来事を新鮮に体験させるそのシステムはまさに演劇そのものであり、その空間は劇場的であると考えられる。アジアの都市集落の調査から、都市の中で発生する劇場（映画や舞台作品の上映とは異なる、日常の風

景や営みそのものに価値を見出していく演劇性が生まれる場）は固定的な舞台と客席を持たず、より「動的」な関係性を持っていることがわかった。その中でも観客がその演劇に介入するレベルの違いがあり、それらを5つのタイプに分類し、設計への展開を試みた。

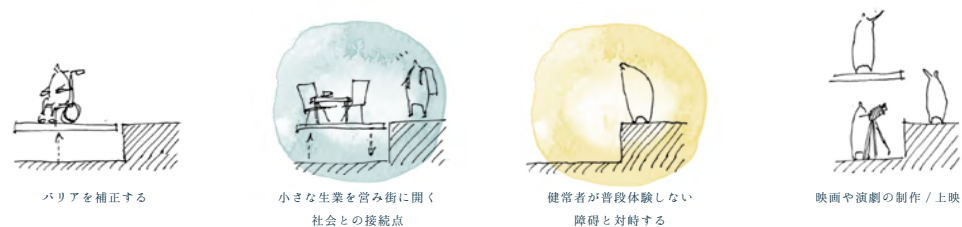


6 | 建築の役割：障害と健常の境界を揺るがす空間

この建築は、それぞれの人々が抱える障害を補正する / 肯定するものであり、それが同時に誰でも入れる余白として街に開かれ、役を失った障害者たちが小さな役を手にする。障害者にとってのアジャスタブルな住宅として機能する。

一方、それは同時に健常者にとっての対峙する場所であり、健常と障害の境界を揺るがす空間となる。そこでは見下ろす側が見下ろされる側になり、健常な身体であったはずが子供や老人の身体性が優位な世界では障害者となる。

建築の役割



7 | 計画：障害を捉え直す劇場化された5つの住宅

7-1
障害の風景を演劇化する
劇場としての商店街

北に東京藝術大学のキャンパス、南に現代演劇のための劇場を有するこの商店街には、演劇や映画祭を目的として少しずつ外から人が集まり始めている。

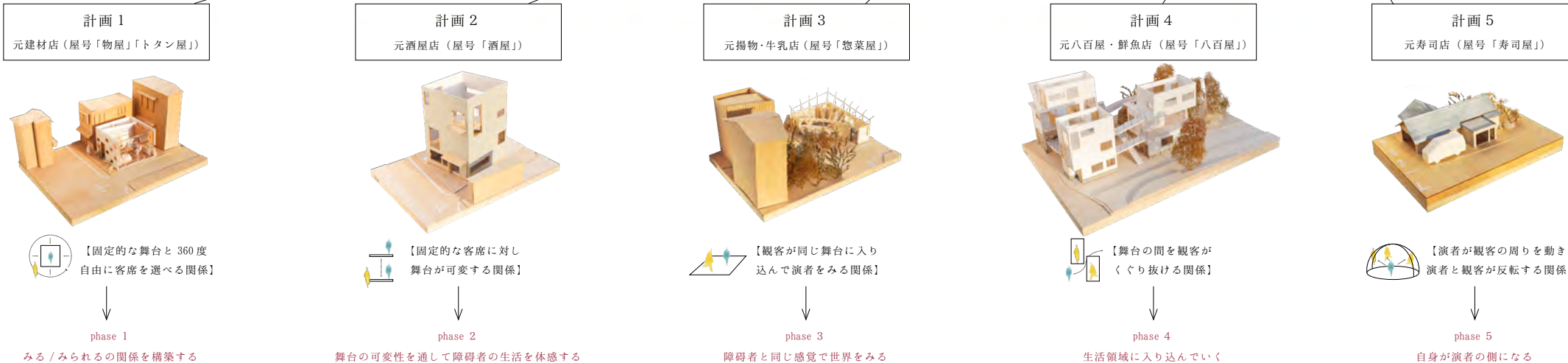
現在はシャッター化してしまった旧店舗住宅を対象に、障害の風景を演劇性へと昇華する為の5つの住宅を設計し、全体を劇場とする計画である。



7-2
劇場としての深度と
福祉のあり方の呼応

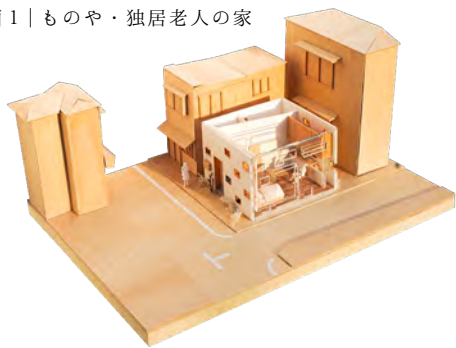
障害には様々な種類や状態があり、多くの繊細な距離感や空間としてのニーズを考慮する必要がある。

その為、本計画では都市空間における5つの演者と観客の関係性を、障害者と健常者の複雑な距離感をデザインするものとして段階的に計画する。5つの住宅を通して徐々に関わり方の深度が大きくなるように配置した。



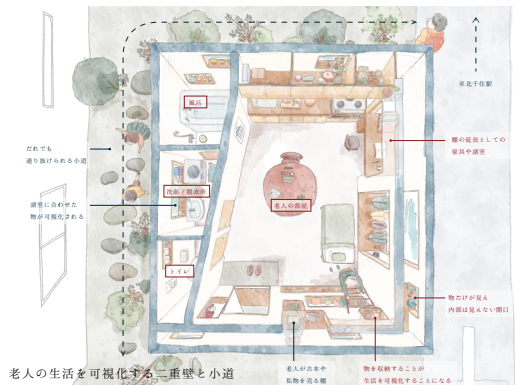
徐々に観客が演劇へと参加し巻き込まれていく

計画1 | ものや・独居老人の家



都市における劇場の中でもささやかな、見る/見られるという関係性の構築から設計を始めた。独居老人は社会との接続の機会や空間を外部に持たない。そのズレを補正するための、観客（隣に住む人や通り過ぎる人）が一方向的に老人を観察し、また老人もそのことを意識して暮らすような、物の可視化による演劇性を目指した。

舞台を中心に観客が自由に客席を選べる関係をもとに、開口のずれた二重の壁によって、視線は遮りながら物を収納するたびに外部に生活の痕跡を可視化、周囲に誰でも通り抜けられる小道を通した。ただ商店街を通過していただけの人々が老人の生活を意識し、老人と社会をささやかに接続しはじめる。



老人の生活を可視化する二重壁と小道



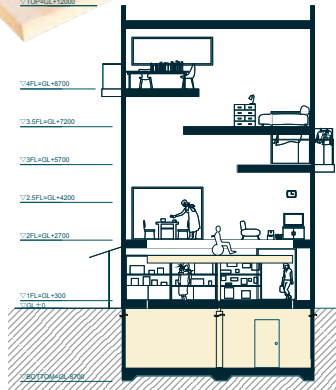
商店街を通過しながら老人の生活を垣間見る

計画2 | 酒屋・車椅子の老人と妻の家

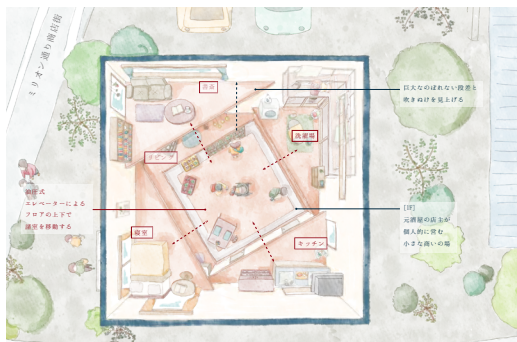
ここでは舞台が可変する関係性をもとに、車椅子のための広いエレベーターを中央に内包した住宅を設計した。



1階は個人的な取引を行う小規模な酒屋、2階以上を居室空間とし、エレベーターの昇降によって生活を展開する。エレベーターの操作を車椅子の老人が行うことで吹き抜けは健康者にとって登れない段差となり、ここでは健康者/障害者の優位性が逆転する。



計画2 断面図 S=1/300

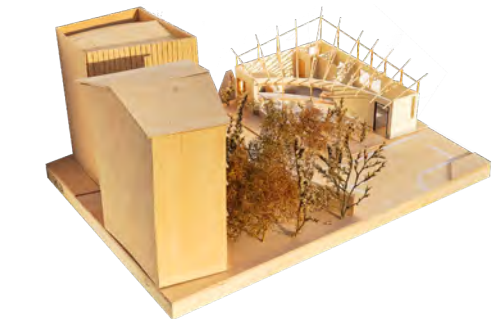


巨大な吹き抜けとそこを往復する可変する床



大きな吹き抜けは、健康者にとって登れない段差として立ち上がる

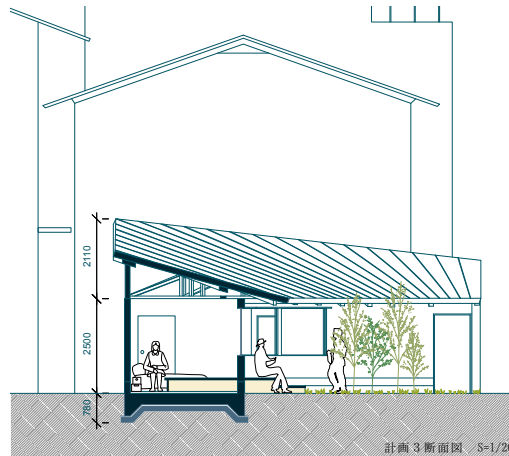
計画3 | そうざい屋・聴覚障害のある老人と娘の家



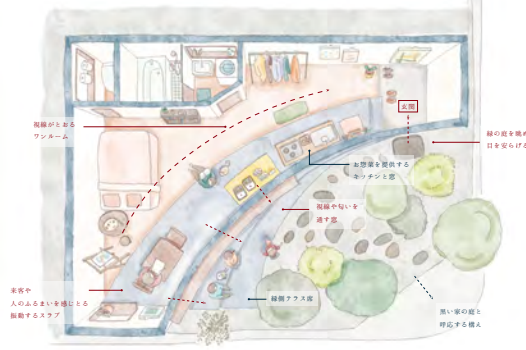
観客が舞台上り込む関係性をもとに、聴覚以外の知覚を共有するための貫通したスラブと窓を設計した。

聴覚障害者は視覚と触覚・振動によって情報を得る。視認性を担保する窓とワンルームの内部空間に加え、外部の振動を内部に伝えるスラブを挿入、匂いを生み出し目を安らげる庭が外部に広がる。

元総菜屋だったことから、ささやかに総菜を売り出す場所として営業し、健康者と店員とのやりとりは、ここでは触覚や嗅覚、視覚を通したコミュニケーションへと変化する。



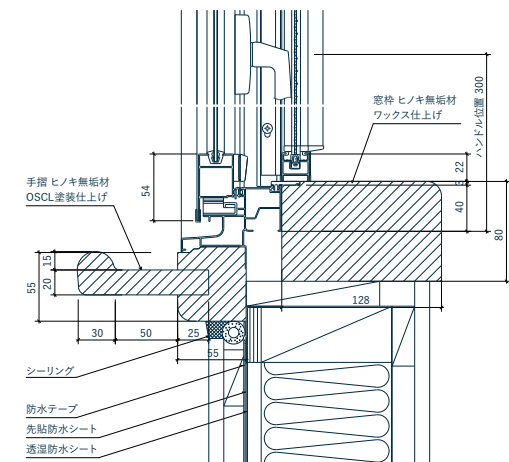
計画3 断面図 S=1/200



聴覚障害を補正するとともに視覚的・触覚的対話を生み出すプラン



内部に貫通するスラブはテラスとして外部の人々を受け入れる



計画3 窓枠詳細図 S=1/5

注文を受け付け受け渡しを行う、内部からの庭への眺望を確保するという多様な役割を持つ大きな窓。ここでは窓枠を香りの強いヒノキの無垢材を用いて厚く作ることで、ただ平滑にするだけのバリアフリーではなく、優しく際立ってくるようなディテールのあり方を考えた。

窓枠の外部は手すりの機能も果たし、やってくるお年寄りや子供達が共通してしっかりと掴めるような仕様とした。



匂いや振動、植物や人々の動きが繊細にやり取りされる場となる

計画4 | 八百屋・シングルマザーのシェアハウス

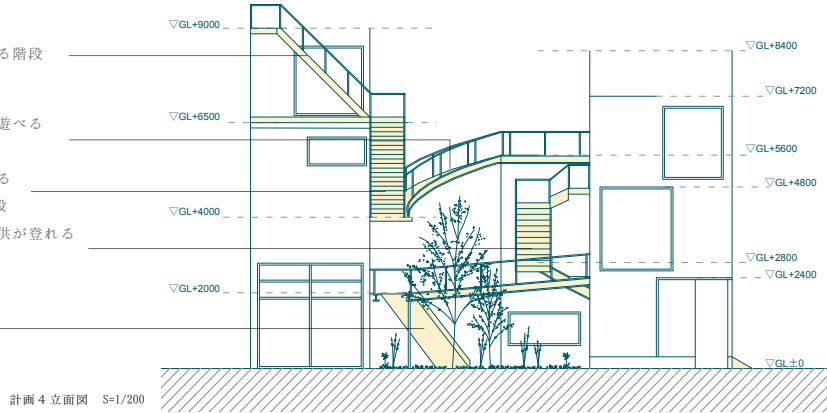


舞台の間を観客がぐくり抜けていく関係性をもとに、3棟のボリュームと通路からなるシェアハウスを設計した。

3棟に6つの家族のための個室ユニットとシェアキッチンや風呂、ランドリー室といった共有部があり、それらのボリュームをつなぐように個性を持った階段やスロープが絡みついている。誰でもその下をぐくり抜けることができる。

ベビーカーで登れる1/12勾配のスロープ、小さな子供でも登れる蹴上160mmの階段、一人になれる階段など、6世代の子供の成長過程に特化した通路が積層することによって、一見健全者には登りづらい通路が子育ての身体性を体感する場となる。

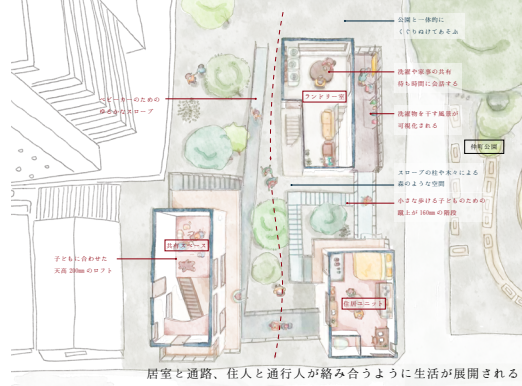
- 中学生の子供が一人になれる階段
- 小学校高学年の子供が登り遊べる勾配のきついスロープ
- 小学校低学年の子供が登れる蹴上200mmで距離の短い階段
- 保育園～小学校低学年の子供が登れる蹴上160mmの階段
- ベビーカーで登れる勾配1/12の長いスロープ



計画4 立面図 S=1/200



様々な世代の子供の身体性に特化した通路が積層する



居室と通路、住人と通行人が絡み合うように生活が展開される



商店街や公園を利用する人々に対し、子育ての様子が可視化される



登りにくい通路が階段が子育てのためのスペース設計に気付けられる

計画5 | すし屋・寝たきりの老人と妻の家



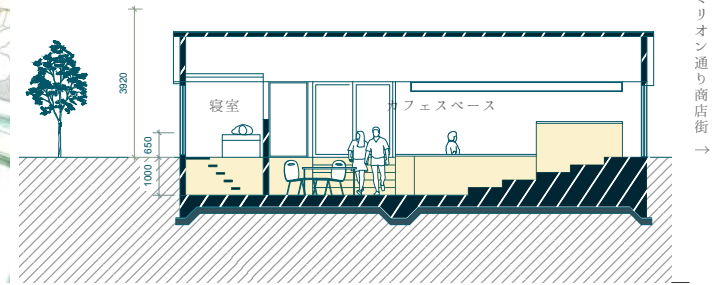
演者が観客の周りを動き回る関係性をもとに、寝たきりの老人以外を動かすことによって演者と観客が逆転するような住宅を設計した。

寝たきりの老人は視線の高さも変わらず、動くこともできない。回避性を生む動線を設け、寝たきりの老人以外の環境を動かすことによって、通常見下ろされる側の老人は、動く人々を眺める観客となる。

元寿司屋を想起させるカウンターでは家族がカフェを営み、接客の中で介護のストレスを緩和できるような場を作る。一番低くなっている空間は1000mm掘り込むことで、ベッドに横になった老人と同じ目線になるように、また老人の寝室とカフェを遮る腰壁に窓をもうけ、老人が好きな時に解放できるような仕様とした。ここに来る人々は、寝たきりの老人の視線からの景色を知り、無意識に自分も演者になっていることに気がつく。



商店街の南端、大通りと接する街角にある現代演劇の上演を行うアートセンターBUoYへの回避動線をつくる



寝室とカフェスペースが動的にフルーム化されたり区切られる



商店街から墨堤通りへの回避性を生む



1000mmの掘り込まれた床によって天高のあるカフェスペースが生まれる



寝たきりの老人の視線からの景色を知る、無意識に自分も演者になっている